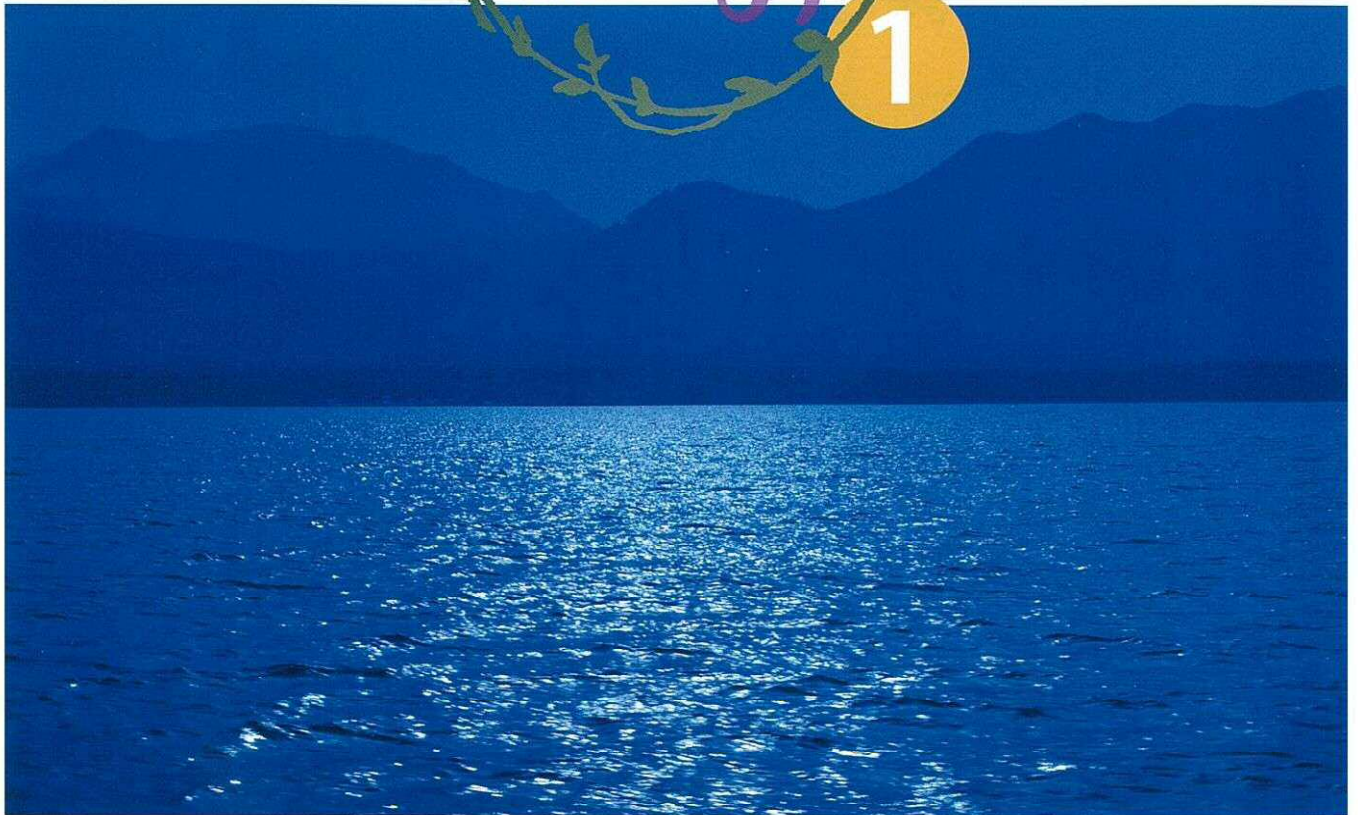


南無阿弥陀仏は
私のいのち



平成 26 年
1 月号

〒110-0012 東京都台東区竜泉 1-20-19
発行所 真宗 佛光寺派 西徳寺
TEL 03-3875-3351 FAX 03-3875-6796
http://saitokuji.tobihiro.jp/
発行人 岸本 秀一
印刷 日生印刷(株) 03-6863-3263



門松は冥土の旅の一里塚 めでたくもありめでたくもなし

お正月を迎えると、いつもこの一休さんの歌を思い出す。繰り返しのように思われて、決して戻ることのないこの人生。確実に死へと向かう人生ではあるが、一休さんは、「世の中は食うて稼いで寝て起きて さてその

あとは死ぬるばかりぞ」と詠われた。誰の人生も同じことかと思う。「雨あられ雪や氷とへだつれど とくれば同じ谷川の水」なので、一見、違うようにみえても同じ人生である。その人生に「老・病・死」ありで、『無量寿経』には「老病死を見て世の非常を悟り」とあり、浄土にうまれば「永く生死の根本を抜く」とある。

まさしく親鸞聖人が明法房(山伏弁円)の往生の知らせを受けて「めでたくそうろう」と書き記したのも、浄土往生において、明法房はその苦難の人生を全うしたからである。

せつかく戴いたこの身には、浄土往生をもつて完結する道が開かれている。年頭にあたり、あらためて人生を見つめ、その人生にとらわれることなく、その道を歩みたい。曇鸞大師は、私たちが、思い込み縛られているこの日常生活は、「実の生死」ではなく「虚空の如き」ものであると教えられる。

下町弁護士

台東区在住 はた 畑 かつみ 克海 さん



今回は台東区元浅草で法律事務所を開業されている弁護士の畑克海さんにお話を伺います。

◆弁護士を目指す

小学校の時は、ブラックジャックという漫画の影響で外科医になろうと思ってたんです。でもやっぱり血を見ると恐くて、無理だろうと…。

私は先頭に立って自己主張はしない方なんです。しかし皆の前で主張はしないで、誰でも思うことはありますよね。私は自分の事ではなくて他人の為なら頑張れる部分もありますので、そういう自分の気持ちを主張できない人に代わって正を主張していきたい、そう思ったのが高校の時です。それで弁護士を志望して法学部に進学したんですよ。

◆弁護士になってみて

思ってたのとは違うかなあ。外から見ると華々しい仕事と思っじゃないんです。でも実際は地味な作業が多いんです。私は民事専門で書面のやり取りが中心ですが、どれだけきちんと関係資料を調べ、依頼者に有利な事実を引き出して書面を提出できるかが大事なんです。テレビドラマのようにはいきませんよ。法廷でかつこよくやっても勝つか負けるかは別問題ですし。

でも人と人の仕事だなあと感じます。色んな人に出会えて楽しいです。

◆敢えて古いスタイル

今は法律事務所も盛んに広告を出していますが、実はうちの事務所はホームページもないんです。古いと言われるかも知れませんが、基本的にはご紹介を頂いた方の事件だけをお受けしています（勿論西徳寺の檀家様は大歓迎です）。

なぜなら紹介する、紹介されるという信頼関係が大切だと考えるからです。また一件一件の事件を時間を掛けて取り組みたいと考えているからです。そういう意味では遅れた事務所だと思えます。

◆会って話す

電話での法律相談のご依頼も多いですが、原則お断りしています。お会いして話す中で真実が見えるからです。メールや電話では皆さん自分に都合の良い事実しか仰らないので一応の答えは出せますが、それで正しい解決になるかは分かりません。

裁判官と違って我々弁護士は片方の側に立ってその方の権利を守るのが仕事です。そのためには有利不利を問わず事実を知る必要があります。事実や本当の気持ちは些細な会話の端々から明らかになったりするんです。だからこそ直接会って時間を掛けて話すことが大切なんです。

◆敷居を下げたい

弁護士は敷居が高いイメージがあるようです。でも御相談者の中には気持ちの整理を付けるために来られる方もいらつしやいます。はじめを付ける一助という面もあるかもしれません。

また、弁護士に聞いたらわりと簡単に済む話が多々あるんですよ。例えば遺言書のたった一語の表現で問題が起こる場合もあります。だからこそ町医者のような身近な下町の弁護士になりたいですね。

（聞き手 山崎哲）

お念仏を伝承してくださった二人目の高僧は、印度の天親菩薩（世親菩薩ともいわれ、400〜480頃北印度で活躍された方・ガンダーラ地方といわれていたパキスタンのペシャワールの生まれ）です。はじめは、地域に伝わる仏教の教えを修学されましたが、兄の無着菩薩の厳しい叱咤によって、大乘仏教に転向されました。そして、すべての人が救われる教えの実現を目指すなかで、『仏説無量寿経』の教えに出遇われ、「帰命尽十方無礙光如来」と阿弥陀仏に帰命することが、自分の本来に帰る道であると感得され、『無量寿経優婆提舍願生偈』（『浄土論』ともいう）を著されました。それで、親鸞聖人は、「天親菩薩、論を造りて説かく、無礙光如来に帰命したてまつる」といわれるのです。

天親菩薩が、阿弥陀仏を無礙光如来と顕されたことについて、親鸞聖人は、「無礙というは、さわることなしとなり。衆生の煩惱悪業にさえられざるなり。光如来ともうすは、阿弥陀仏なり。（『尊号真像銘文』）」といただかれます。つまり無礙光如来という名を大切にされるのは、私たちが、煩惱悪業にどっ



(ペシャワール)

ぶりつかつていながら、そのことに気づかず、自分中心の眼で狂いはないという生活をしているからです。夫が妻に「お前のめがねはいつも、間違っている」といえば、妻が夫に「そうよ、あなたを選んだと

この底を知らぬ人間の業からの解放は、「衆生の煩惱悪業にさえられざる（いかなる煩惱悪業にも妨げられない）」無礙光如来のよびかけに帰命する道しかないからであります。

正信偈の話 (29) 松井憲一
 天親菩薩造論説 帰命無礙光如来 依修多羅頭真実 光闡横超大誓願
（天親菩薩、論を造りて説かく、無礙光如来に帰命したてまつる。修多羅に依りて真実を顕して、横超の大誓願を光闡す）

きから間違つてたの」といい返す。そして、「まっすぐな きゆうりならんで 痛々し」「人のため ビー ル飲むとは 知らぬ牛」という、人間優先の状況を生きています。

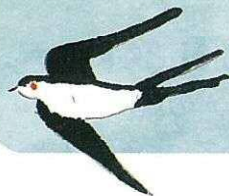
そして、この帰命の道は、天親菩薩が「修多羅に依りて真実を顕して、横超の大誓願を光闡」されたことによつて、一層明らかになつたといわれます。親鸞聖人は、修多羅について、「修多羅は天竺のことば、仏の経典をもうすなり。仏教に大乘あり、また小乗あり。みな修多羅ともうす。いま修多羅ともうすは大乗り。…真実功德は誓願の尊号なり。（『尊号真像銘文』）」といわれ、横超については、「横（ヨコサマ）は、豎（タテサマ）に對することばなり。超（コユルナリ）は、迂（メグ

ルナリ）に對することばなり。豎と迂とは自力聖道のころなり。横と超は、すなわち他力本願の本意なり。（同）」といわれます。すなわち、帰命の道は、大乘の教典である浄土三部経の真実が、誓願の尊号・南無阿弥陀仏となつて、私に届いているからであるといわれます。凡夫が共に助かる道は、いかに求道心と修行能力を頼りとして一歩一歩「タテサマ」に歩んで、ぐるぐる「メグル」だけで、真実に出遇うことができませぬ。それで、一挙に「ヨコサマ」に超えて来てくださる大誓願によつて帰命できるのだと、光闡（広く開いて明らか）にされたといいただかれます。それで、親鸞聖人は、「釈迦の教法をおおけれど 天親菩薩はねんごろに 煩惱成就のわれらには 弥陀の弘誓をすすめしむ（『高僧和讃』）」と讃えられます。お釈迦さまの教えは、相手によつて多面にわたつて説かれますが、われらは煩惱の生活がしみついて、そこから、一歩も離れることができませぬ。それで、天親菩薩が、弥陀の本願にめざめて、懇切にお念仏に遇えるようにお勧めくださったと、喜ばれるのです。

山門の言葉

お念仏は請求書ではない、 領収書だ

米沢英雄



これは医師であり、お念仏の教えを聞いてこられた、米沢英雄先生の言葉である。

請求書・領収書という言葉自体は、日常生活の中で使う言葉なので、特に疑問に思わない。しかし、「お念仏」という言葉に続くとなると、一体何を言い表してあるのかということが疑問になる。

この言葉の中で言われる「請求書」とは、私達が普段どのようなお念仏を申しているのか。若しくは、お念仏に対する思いというものを言い表しているのではないだろうか。お念仏を申すといつても、「これだけお念仏申したのだから、どうか私を助けて下さい」と、こちらの要求を突きつけるようなお念仏を申している。まさに仏様に何かを請求するようなお念仏である。

思い返してみると、私達はお念仏にかかわらず、日常生活に於いても同じようなことをしていないだろうか。

か。「これだけのことをしたのだから、こうしてもらわない」と、見返りを求めるような在り方である。つまり、自分の要求が満たされることしか考えていない。

お念仏のはたらきは、そのような在り方でしかない我が身を照らし出し、私が今ここにこのようにして存在出来ることを、「領収書」という言葉で言い表して下さっていると感じる。気付いてみれば、私は既に仏様のはたらきの中にいた。それにもかかわらず、どこまでも満たされることのない私に、本当の自分を教え、そこに安心して立たしめて下さる。

今回頂いた言葉は、私からお願いするのではなく、仏様に願われていることを明らかにして下さった言葉であり、私のはからいが混じったお念仏は、どこまでも自己満足でしかないことを、言い表して下さったのだと感じている。

(大橋 伊知郎 記)

日誌

- 11月19日 東京教区会務報告
仏教青年会報恩講 講師 有馬 賢照師
- 11月23日 同行会「正信偈の教え」に聞く 法話 仲井 真裕
- 11月24日～28日 御正忌報恩講 出勤 (補導式務衆として岸本住職、御堂式務衆として蓮井・仲井、坊守会に岸本坊守参加)
- 11月27日・28日 宗祖忌
- 12月3日 企画委員会
- 12月7日・8日 中興忌
- 12月8日 くまくま会
- 12月11日 東京教区研修会(西徳寺)
- 12月14日 混声合唱団「エコー」練習
同行会「正信偈の教え」に聞く 法話 岸本住職

えこお志お礼

ご浄財を頂戴いたしましてありがとうございます。
ご芳名の掲載をもってお礼とさせていただきます。

- | | |
|-----|----------|
| 長崎県 | 正覚寺 様 |
| 品川区 | 市田 幸子 様 |
| 中央区 | 今井 和彦 様 |
| 板橋区 | 鈴木 喜美江 様 |
| 台東区 | 高島 イツ 様 |
| 越谷市 | 小林 清蔵 様 |
| 中野区 | 阿部 典子 様 |

年頭所感

年頭にあたり、つい「今年こそは」と言ってしまうのですが、実は、法然上人、親鸞聖人の流れを汲む私たち真宗門徒においては、「今年こそは」と夢見るのではなく、「今」が大事なのです。「いつやるか？ 今でしょ！」(流行語大賞 林修氏)といわれるように、「思い立つ心の起こるとき」が大事なのです。

今から 386 年前、西徳寺は、京から江戸へと移転し、常に「今」を、ご門徒とともに確かめつつ活動してきました。その西徳寺が、寺へ人を集めるだけではなく、人の集まりやすい所に出掛けていって、共に教えを聞く会、「出かけていく聞法会」を始めて、本年は三十周年にあたります。その記念大会を **平成 26 年 6 月 14 日(土)** に予定しています。門信徒の皆様と共に三十周年を新たなステップとして集いたく思います。

人間が生きていくうえで一番必要なことを、親鸞聖人は、「真宗」という言葉でお示くださいました。「真宗」に出遇えば、誰もがどんな状況の中でも、いきいきと生きることができると教えておられます。真宗とは、お念仏申す身となることによって、人間が成就することであります。今年も、いろいろなこと、予期せぬことに出会うことになります。何が本当に大切なことか、ともに教えに聞いて行きましょう。



仏教青年会報恩講

去る 1 月 19 日に仏教青年会の報恩講が勤まりました。ご講師には、かつて西徳寺の法務員として 10 年間活躍され、現在は長崎県島原市・真光寺の副住職である有馬賢照師をお招きし、「念仏者の生活」という講題でお話をいただきました。

ご法話では、念仏者とは念仏を依りどころにする生活であること、そして自分の在り方に気づかせていただく身になることだと説かれ、ご自身の出来事を交えてお話されました。

会員さんにとって久しぶりの再会でもあり、「昔と話し方が変わったね」という感想が出てくるなど、終始和やかな雰囲気でありました。

次回の青年会は **1 月 28 日(火) 午後 7 時** より行います。どなたでもお気軽にご参加ください。

(高橋 淳 記)



私は昭和 57 年生まれ(31 才)で、新潟県出雲崎町にある万因寺の出身であります。大学では生物学を学んでいましたが、祖母の死がきっかけで僧侶になりたいと思い、途中外食産業の仕事を経て平成 20 年に西徳寺に入寺しました。

当たり前かもしれませんが、私は人との関わりを、より大切にしたい僧侶になりたいと思います。仏様の教えとは、部屋に籠もって自分一人で知識を身につけていくのではありません。いろんな人と共に先人の言葉を学ぶことであり、それが僧侶の勤めであるといわれています。

西徳寺は皆様との関わりの中で念仏の教えが受け継がれてきました。ですから、相手と話し、一体どういうことを考えられているのかを聞き合える関係・環境を築き上げていきたいと思っています。

そのためには何をすべきか。私が思うに、今自分に与えられている役目を精一杯務めることで話し合える関係が出来ると考えます。様々な人々の関わりを通して、お念仏の教えは私に何を呼びかけているのかを学んでいきたいです。

例えば私はお寺の活動の中の一つである混声合唱団「エコー」に入団しております。初めての方でも声を掛け合って楽しんでもらえる環境を作ることが、私の役割だと思っています。

職	員
自	己
紹	介

高橋 淳



掲示板

平成26年1月

- 元日(水) 午前6時 修正会
11日(土) 午後3時半 混声合唱団「エコー」練習
12日(日) 午前11時 婦人会新年会
18日(土) 午後1時半 定例聞法会
午後3時半 混声合唱団「エコー」練習
19日(日) 午後3時 評議員会新年会
22日(水) 午後4時 総代会
25日(土) 午後5時半 同行会新年会
28日(火) 午後7時 仏教青年会「歎異抄」に聞く
講師 宗正元師

城北ブロック会

去る11月17日(日)、大塚・大和田におきまして、城北ブロック会聞法会が開催されました。今回は初めて参加される方2名を含む、22名の会員の方に出席していただきました。初参加の方は少し緊張されていたようですが、他の会員さんと話をされているうちに笑顔になり、楽しんでおられるようでした。

住職の法話では、南無阿弥陀仏とは私たち衆生を何とかして救いたいと願われ、誓われた阿弥陀仏の大悲のはたらきである、ということをお話いただきました。

懇親会では、最後に住職から日常生活を詠った川柳がいくつか紹介され、会員の皆さんは自分にも身に覚えがあることなのか、始終笑いながら「うんうん」と深く頷いておられていたのが印象的でした。

次回は平成26年3月9日(日)、王子北とびあにおきまして聞法会を開催します。大勢の方の参加をお待ちしております。(蓮井 邦宗 記)

早いもので月めくりのカレンダーが一枚となりました。今年も一年お世話になりました。毎月「ともしび」「えこお」、また婦人会誌のお知らせ等送っていただき、いつもお寺様の様子がわかり、皆様とつながっている気持ちでいられます。

お礼申し上げます。今後共よろしくお願い致します。

(船橋市 藤井 美津江 様)



読者の声

今年も「えこお」ありがとうございました。また今日はカレンダーをありがとうございました。

1月号の「み仏の み名を称ふるわが声は わが声ながらたふとかりけり」、ただ念仏を称えるだけであつたら空念仏ですと、先生は言われていました。

「十七願の諸仏咨嗟の願と言われ、心から感動してナムアマミダ仏あればこそとなつたとき、初めて仏は仏になれるという意味です。口称の念仏では、仏を仏にすることは出来ない。

如来大悲の只中に生かされているのに、人間はささいな行為を恩に着せている。させていただくことが、仏恩報謝が大きな転換である。ナムアマミダ仏のはたらきをうけて、はじめて可能になる。これを回心というのです。」(米沢英雄)

(愛知県 吉村 かほる 様)

編集後記

正月は「年神様」という新年の神様をお迎えする行事だといわれています。年神様は1年の幸福をもたらすといわれ、それぞれの家に迎えてお祝いし、幸せを授けてもらうために、様々な正月行事や風習が生まれてきたといわれています。

西徳寺では元旦に修正会を勤めております。阿弥陀仏の本願が經典の言葉となり、親鸞聖人のお作りになられた『正信偈』のご文となって私たちによびかけています。それは南無阿弥陀仏のいわれを聞き開き、一人ひとりに与えられたいのちに目覚めよとのご催促であります。

本当の幸せとは何か、本年も共々にお念仏のみ教えを聞いて参りましょう。

合掌

(主任 木村 記)

西徳寺ホームページアドレス：

 <http://saitokuji.tobihiro.jp/>

ゆうちょ銀行お振り込み口座 00120-0-80670 名義 西徳寺

※「えこお」に対してのご意見・ご感想をお寄せ下さい。(メールでも結構です)

 saitokuji@ce.wakwak.com